第十二号

ねこみの

猫養通信

平成五年
（１９９３）
七月十五日発行
〔年四回発行〕

発行人　東 明雅
発行所　柏市つくしが丘２－２－１２東 明雅 方
Ｔｅｌ．０４７１－７５－１１９２

矛盾付（Ⅱ）

東 明雅

私はこの誌の第十号（平成五年一月十五日発行）に、高橋玄一郎氏提唱の矛盾付を紹介し、前句に相反するもので付句を考え付けて行くその方法の、可能性と危険性について考察した。

現代連句シンポジウム「現代詩人による公開連句実作と討論」が東京九段下のホテル・グランドパレスで開催されたのは、「ねこみの通信」第十号が出てわずか十日後のことであるが、この会での作品「初音」の巻が、この矛盾付によっていると思われるので、重ねて取り上げ、この問題を論じてみよう。この作品はウラの２句までは下俳諧なので、ウラの３から取り上げることにする。

３１　楽劇の草稿展ぶる木の床に　　実
２　　更けし街過ぐ風のたてがみ　真紀
３　類痩せて聖母たること肯へり　〃
４　　グアダルーペは沈みゆく寺　睦郎

この３「類痩せて聖母たること肯へり」は、その前句２「更けし街過ぐ風のたてがみ」とは、全く別のことを述べているが、前句の淋しい気分をつかんだ、いわゆる起情の自の句である。その点ではうまい句である。しかしながら、打越から考えると、その打越が既に何か淋しい自の句であるから、何か観音開きの感がしないだろうか。

４の「グアダルーペは沈みゆく寺」、この句だって同じである。前句の聖母からメキシコの聖地の寺が出たのであろう。其場の付けであり、前句に対してはよい付味である。しかしながら、この句は人情なし、場の句であるが、打越の「更けし街過ぐ風のたてがみ」も人情なし、場の句である。しかも淋しい気分の句である。これも２と４は観音開きであるとともに、２・３・４は淋しい気分の一続き、強いて言えば、１も多少その気分があるから、１・２・３・４、四句にわたって淋しい景情が続いていることになろう。

さらに言えば、１の楽劇、３の聖母、４のグアダルーペの句に共通する海彼的印象もまた、この四句の気分に転じ・変化のない大きな要因であろう。

ここで私は、詩人西脇順三郎の次の言を思いだす。

「二つの相反するものの融合」ということを、ゾルガーというドイツの美学者もボードレールもイロニー（「奇遇」とでも訳してみてもよいと思う）と言っている。そうしたイロニーがなければ芸術が存在しないと彼らは思っている。それは超自然の存在であり、論理の世界を超越して、矛盾が矛盾でなくなることを意味するのである。芭蕉の「俳」は、この「イロニー」にあたるものである（はせをの芸術）。

現代連句シンポジウムの各位は詩人であるから、矛盾付を採用されるのは当然であるが、連句はそれ以外に転じと「俳」が必要であることを認識されるべきであろう。

ソフトな工夫

浅野 黎穂

連句の活用の一つとして私は神経症などの患者さんと連句を巻くようになった。このことを人に話すと肯定的に聞いて貰えることが多い。実際効果があると思うのでそれを言うと「多分そうでしょうね」と賛成してくれる。連句をやっていない人でもそうなのでわれわれ民俗の共通イメージによるのだろうかと思ったりしています。

以前ドストエフスキーの「地下室の手記」を読んで、自分はこの主人公にそっくりだと思った。私も心理的な壁に閉じ込められて出られない不幸な性格でした。所が初めて連句の座に出た時、自分も壁から出られて人生が変りそうな予感がしました。それから約二十年、ほぼその通りになっているというのが事実です。あるいは日常生活で落ち込んでいる時でも、気が重いが思い切って連句会に出てしまうと本当に心が軽くなる。なぜこういう効果が生まれるのだろうか。いろいろ考え、また絶えず考えていてなかなか決着しないが、これを考えるのも楽しいものです。

ごく大まかに言ってしまうと、連句では創造に参加する。それも人間関係のコミュニケーションの中で行なわれる、というのが効果の条件になっているのでしょう。次に自分が治療する立場になった時のことを考えると、患者さんとは人生を異にし、立場を異にしているが、一緒に連句を巻けば、「工夫する姿勢」を共有することが出来る。あとは患者さんが連句で引き出した能力を使って気の整理をつけて行くだけです。

芭蕉の弟子の其角を読みながら「日々の工案」という言い方を学んだ。私はこれを患者さんとの連句を成功させるキイワードのように心に置いています。これはたとえば同じ素材も料理人の工夫でさまざまに活かされるようなことだと其角は説明している。私流かもしれないがこの日々の工案の「日々」を重視しています。せっぱつまって必死で出す知恵も大切と思う。しかし相手をドキッとさせたり、どうだと唸らせるような知恵ではなくもっとささやかに、句をちょっと工夫し、付けにもちょっと工夫するという姿勢を心がけていると相手に同じような姿勢が誘発されるようです。

芭蕉記念館　連句教室

秋元　正江

連句教室は俳句文学館の「連句ゼミナール」の受講生の実作の場として昭和五十六年三月七日に第一回が開かれ、翌月にACCの連句講座が始まってその受講生が参加した。

平成五年七月で第百四十四回を迎える。十余年を過ごした関口芭蕉庵は、都電荒川線の早稲田から神田川にかかる駒塚橋を渡り水神の森を左手に、樹木鬱蒼とした胸突坂を登りかけた右に庵の木戸がある。この道筋を歩いて庵の沓脱ぎ迄が茶室に至る露地なのだ。

庵の畳に手を揃えて挨拶、卓に歳時記をひろげる。あとは季節の流れに身をおいて心の中を吹き抜ける風を確かめればよいのだ。奥深く潜んでいて気付かないものが、前句に触発され作者も驚くような付句が生れ、治定されたときのよろこび。一座を生きている証しの刻が過ぎる。心弾んで巻き進んだときも、又調子の悪かったときも、夫々に充分に楽しかった。

竹のさやぎをくっきりと写す玻璃戸、梅雨に降りこめられ昼なお暗い庵、蚊遣りの匂い、炎暑に籠っての百韻、風に耳をそばだて、雪の傘をたたんだ大壺、この移ろいのなか次第に連句のとりこになっていった。

談笑は絶えないが、いつか自らなる俳諧の作法に気が付いた。式目だけが連句ではなくもうひとつ大切なものがあるのだ。

明雅先生の清々しい連句を庵の歳月の中でお導き頂いたご恩は決して忘れることができない。

その間一貫して連句教室のプロデュースに情熱を傾けられたのが杉内徒司氏である。

折々の発句

うめ咲てとととのふ庵の景色かな　明雅
鯉の口花一片を吸ひこめり　和久
花びらを挿頭に庵の集ひかな　正江
薔薇の月空の青さを讃ふべく　千町
草庵や蛍袋に雨しとど　明雅
佇めば水音満つる芒種かな　清子
麦稈蛇ちょいと出したる紅の舌　明雅
青梅雨や樹の香を運ぶ通り風　宗海
藪茗荷半ば実となり芭蕉庵　郁子
あさがほ市ほおづき市も間近とや　隆秀
ねぢれたる糸瓜眺むる庵の午後　徒司
曼珠沙華その名哀しきことばかり　千恵子
蔓たぐり残る小さきものの音　あかり
これやこのくらげの骨の秋扇　水壺
懐に発句三つ四つ白露かな　海砂
菊の香もやや移ろいて師走なり　K

平成四年四月五日庵建直しのため庵とも別れ告ぐるや菜種梅雨　千恵子

平成四年五月三日より江東芭蕉記念館飛びこめぬ石の蛙や春深し　明雅

季刊連句3号に明雅先生は〝一座の興〟を書いていられる。その中の「俳諧独稽古」から現代に通じるものを抜いてみた。

一、　出座遅参（席に遅れてやってくる。やむを得ぬ事情があれば別である）

一、　自分の句吟ずる講ずる（自分の句を得意になって吟じたり説明したりする）

一、　他の句難じ、況んや他の句を返し自分の句付る（他人の作句を批難、ましてや他人の句に難癖をつけてとり消させ、その代わりに自分の句をつける。こんなあつかましい事はない）

連句教室は原則としてお酒は終了後、蕎麦屋でということだが差入れは徒司氏に許しを得て（多々あるが）頂いている。

毎月第一日曜日　於　江東芭蕉記念館

連衆との出会い

野崎　守秀

連句という表現の形式にはずいぶん前から興味をもっていたが、芭蕉の『七部集』を読みこなしたことはなかった。いまだに読みこなしていない。それはともかく、そうした興味から、友人と企って私流の歌仙興行を催すことを何度かしてきたが、作法のディテールも、よい連句とはどういうものなのかという点も、納得に至らなかった。どこか教えてくれる所がないものかと気をつけていて、朝日カルチュアーで東明雅氏が講座を開いていることを知った。学校嫌いというのは大体の男の常だから女性が多いのではないかと思いながら、この四月から行ってみると、案の定そうだった。こんなにも多くの女性と一堂に会するのは、私にとっては始めての経験だった。

そこで深川の芭蕉記念館で月初めの日曜日に連句教室が開かれていることを杉内氏から教えられて、臆面もなく出かけることにした。ものおじの方に心を寄せるよりは経験を積むことを優先させた方がいいと思ったからである（といっても、現場での動転は人後に落ちなかったが）。今まで接する機会がえられなかったさまざまな連衆に出会えるのではないかということもう一つの期待だった。

面白い方がたがいるという気がした。面白い、というのを自在に生きている人、といいなおしてもよい。場の気配がそんな風だったし、縁あって言葉を交した人たちの生への構えにもそんな雰囲気を感じた。芭蕉がそうだったように俳諧に興味を示す人なんぞというのは大方は変り者だろうが、面白い変り者に更に出会えるのではないかと、これからが愉しみである。

俳句と連句

八代　良子

私が俳句と連句を学び始めて、まだ一年数箇月であるが、この二つは今の私の生活に深く関わるようになってきた。

俳句では、いつも投句に追われている。週一回の実作講座、結社の俳誌、句会などに句を揃えるために、私はよく吟行する。都心の公園や埠頭などをよく歩くが、時によると、衝動的に山に逢いたくなり、特急「あずさ」に飛び乗ってしまう。

山に抱かれていると、自分の心が全てのものから解き放たれ、素直になっていく。取り巻く自然の一点に目を凝らしてみる。しばらくの間、そうしてみる。一体、この淋しさは何だろう、といつも思う。淋しさを見つめている自分、そして、その自分を見つめている、もう一人の自分を感じている時――。それは、まさに陶酔の時である。

一方、連句は昨年（平成四年）の四月から学び始めた。

明雅先生のご指導を、連句に関して全く白紙の状態の私が受けられたことは、勿体ない程幸せなことであったと思う。

実作に関しては、特に「土良の会」で正江先生を始め先輩の皆様が熱心に導いて下さる。このような恵まれた環境の中で巻いていく度に、連句の深さや楽しさを感じている。そこには、一つの作品を創りあげていく喜びを分かち合える仲間がいる。

博学多識な連衆の中に入って、私が生まれてこの方聞いたこともない言葉が頭の上を飛び交う。一巡で付けていく時、私はいつも残ってしまうが、その際のプレッシャーといったらない。しかし、それでも連句は楽しいと思っている。今後とも俳句と連句ともにぜいたくに関わっていきたい。

困った時の猫頼み？

八角　澄子

猫蓑では、何かというと四句目に犬猫、お茶かコーヒーが来るという噂は果して本当だろうか。梅雨のひと日をつれづれなる儘に、今年度の猫蓑作品集Ⅲを繰ってみた。

ところが八十七篇中、四句目の猫はたった三句、犬も三句で計七％である。作品集Ⅱではどうか。猫十句犬四句計十六％であった。猫は飽きられてしまったのか。

お茶コーヒーはどうか。作品集Ⅲで十句、十二％あった。しかもお茶コーヒーに一寸した軽い食べ物を含めると二十四句もあり、全体の二十八％にもなった。

細めしガスにジャムを煮てをり　貞子
サ行の順にボトフ味付け　利子

明雅先生のお講義、猿蓑集「市中の巻」をお聴きになった方は思い出されるだろう。

二番草取りも果さず穂に出て　去来
灰うちたたくうるめ一枚　凡兆

これぞ四句目のお手本として習った。今の飲み物食べ物の句流行もうるめ一枚からか。

この他、ファックス、ジグソーパズル等機械もの、子供をからませたり、趣向と工夫の跡が随所に見られる。　更にもっと進んだ付けがあった。

ソーダ水チーズケーキを跳へて　明雅
里の果より女三人　曹人

「里の果より」が利いて女三人は東方の三博士みたいだ。最近のＡＣＣ教室の二十韻。

新作の春の装ひ揃ふらん　健悟
カフェオーレをふたつ注文　和子

ふたつのカフェオーレは恋人用？　或いは商談？　と幾重にも読めるのがすばらしい。

「軽く易く、瑒合によっては芽の出る種を播け」「何か一つ工夫を」と式田和子氏。

軽い四句目、一筋縄ではいかない。

連句とお酒と私

上月　淳子

連句とお酒はつきものです。一巻の中に必ずお酒の句が詠まれますし、表がすんだ時、「乾杯！　よろしく」と杯を上げ、お酒が解禁となり一座が和みます。連句をなさる方々は、お酒のお強い方が多く楽しんでお飲みになります。第一、御師匠様の明雅先生からして、飲む程にテーブルを叩いて呵々とお笑いになる御機嫌のよいお酒ですし、女性でも「うはばみ某」と二つ名の酒豪もいらっしゃいます。その中に入って私は丸っきりの下戸で、連句の席でワンカップを前にしていますと、「淳子さん、ちっとも減らないね」「ちびちび頂いてます」「それは飲むなんてものじゃない嘗めるだわね」と云われ小さくなる始末でした。

それが連句を始めて五年位した時、百韻を巻く機会に恵まれ、その時午前中から一日かかって文字通りチビチビとワンカップをあけてしまい、「淳子さんすごい酒豪になったわね」とからかわれ、ワンカップを一日かかる大酒豪だと笑ったことでした。それから時がたちいつの間にか、歌仙一巻の間にワンカップ一杯あける様になりました。そのうちには、連衆の方が地酒が入ったから、皆で飲もうと思ってとお持ちになる珍しいお酒を飲みくらべては、甘いの、辛いの、おいしいのと生意気なことを云う様になり、私のお酒は連句のおかげで長足（？）の進歩を遂げたわけです。或る時このいきさつを連衆におしゃべりしましたら、早速「下戸が上戸になりし顛末」と一句つけられてしまいました。

この様に順調に進歩した私のお酒も、今年の冬思いがけぬ病気で入院、手術となり、またもとの下戸に戻ってしまいました。でも健康を取り戻しつつある今、夏のビールを嘗めるところから修業のやり直しをと思っている、今日この頃です。

○　○　○　○　○

猫蓑同人会報告

六月九日、プリンス・プリンセスの晴れのパレードの日は、あいにくに朝よりの霖雨でしたが、たまたまこの日に、第三回猫蓑同人会が会員二十六名出席のもとに、深川清澄庭園で開かれました。

この庭園は、元禄のむかし紀伊國屋文左衛門の別邸跡で、明治になってから三菱財閥の創始者岩崎弥太郎が買い取って造園、のち東京市に寄付され、いまは都の管理となっている下町の名園のひとつです。

会場である涼亭の座敷を巡る広い回廊から眺めた、折からの雨が池の面に幾多の波紋を広げている風情は、格別でした。

定刻午後一時、式田さんの司会で、明雅先生、秋元会長挨拶と会が進められ、会計報告、作品集報告も全員の承認を得たので、それより直ちに五席に分かれて、歌仙興行。午後四時頃には雨もあがって西日が眩しく差し始め、六時には全席巻きあがって、作品披講。また明年を期し、散会しました。

（係）

○　○　○　○　○

訂正

「猫蓑作品集Ⅲ」中、Ｐ35の、

17　水中り陀羅尼を服んで間にあはせを

17　水中り陀羅尼助服み間にあはせ

と直します。「陀羅尼助」は薬ですが、「陀羅尼」はお経のことでした。

（加藤）

◇　猫蓑発展基金ご協力感謝いたします。

一口　杉山壽子　武村利子　佛渕健悟

◇　発展基金は随時受けつけております。よろしくお願いいたします。

振替口座　東京３－５５０３４８
猫蓑同人会

＊　連句とさかな　＊

ほや（海鞘）

杉江　杉亭

キュウリとホヤは夏の風物詩として欠かすことが出来ない。

二十年ほど前の夏。日本橋のデパートでホヤを見付け、家に持ち帰って調理を始めた。パイナップルのような外皮を庖丁で裂いて黄色の肉を取り出し中の体液も別の容器に入れ、キュウリとホヤに体液も加えて二杯酢に仕立てた。

強烈な磯の香がたまらなく酒興をそそり、その日の晩酌の味は今思いだしも懐かしい。

檀一雄は、『わが百味眞髄』の中でホヤの味を「忘れていた夏。忘れていた浴衣の女」にたとえている。

瓶詰のホヤの塩辛に飽きた方には是非、三陸沿岸のホヤ探訪の旅をおすすめする。

質問コーナー

東　明雅

【Q】「文台引き下ろせば反故」という言葉が連句にはあると聞きますが、校合というのは矛盾しないのでしょうか。又、作者名が入れ替わることがあるのはどう考えたらよいのでしょうか。

（所沢市　吉村恵美子）

【A】「文台引き下ろせば即反故也」とは、土芳の「三冊子」に出ている芭蕉の語です。もともとは許六の「篇突」に、「誹諧は文台上にある中とおもふべし。文台をおろすと、ふる反故と心得べし」と書かれた芭蕉の言葉に依っています。土芳はややこれを転じて用いていますが、その意味は連句における創作と享受の一体化、すなわち一座の張りつめた気分の中で、連衆同士、あるいは連衆と宗匠の詩魂がはげしくぶつかりあう。この白熱した創作と享受の楽しさ、それが俳諧の生命で、一巻が満尾して文台から引きおろされた懐紙は、もはや反故にひとしい無価値のものだというものです。

しかし、この「座の文学」としてだけの連句がすべてかと思うと、そうばかりとも言えないので、これほど激しい言葉を吐いた芭蕉自身、決して使用ずみの懐紙を反故として破ったり、棄てたりせず、筆を加えて推敲・添削し、また、その作品を弟子たちが出版することも拒もうとしませんでした。これは座を離れた一つの文学作品としても俳諧を認める立場を取っていたもので、私どもも、一座の楽しみは楽しみとして、さらに、それを校合して、よりよい作品を残すようにしている次第です。これは連句という芸術に座の性格としての特性と、書かれた文学としての性格が共存している為です。

一座している時の作者はもちろん捌きと連衆ですが、出来上がった作品を校合するのは捌きですし、出来上がった作品の作者は捌きなのです。

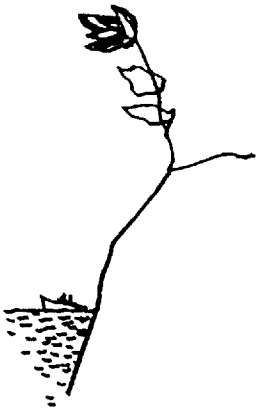
それ故、捌きは、作品の一句一句を添削・加筆する権限はもちろんのこと、都合によっては、句を差しかえ、また作者名を変更することもできます。たとえば、元禄二年「おくのほそ道」の旅の第一作「秣おふ」の巻の名残の裏は、

ろ1　今日も又朝日を拝む石の上　芭蕉
2　米とぎ散らす滝の白浪　二寸
3　籏の手の雲かと見えて翻り　曽良
4　奥の風雅をものに書つく　翅輪
5　珍しき行脚を花に留置て　秋鴉
6　弥生暮ける春の晦日　桃里

ですが、これが2以下全く改められ、

ろ1　今日も又朝日を拝む石の上　芭蕉
2　殿つけられて唯のする舟　翅輪
3　奥筋も時は変らずほとゝぎす　曽良
4　噛まずに呑めと投ル丸薬　翅輪
5　花の宿馳走をせぬが馳走也　桃雪
6　ふさぐといふて火燵そのまま翠桃

となっています。これはちょっと極端な例ですが、これも理由のあることでしょう。ことに月花の句主、あるいは出勝の場合、出句数の極端なアンバランスも直してよいのです。



鳴立庵一八世鈴木芳如

杉内　徒司

都心連句会の月例会で顔を合わせる鳴立庵山路閑古氏のお誘いで三月の西行祭に参加した折、前庵主鈴木芳如女史から沢山の資料を頂いたので、翌年の第一回俳諧時雨忌にお招きして明雅捌席についてもらった。芳如は翌昭和四七年一一月二八日、八九歳でなくなられたから、お目にかかったのは二回だけ。

芳如が入庵した昭和一八年頃の鳴立庵の建物は荒廃、訪れる人も少なかったが、戦時中のこととて何の手も打てなかったという。

戦後芳如は考えた。鳴立庵主は四世白井鳥酔、五世加舎白雄、八世倉田葛三等の名人が在宅していたから俳諧道場として全国的に知られてはいるが、連句で復興するには時間がかかりすぎる、やはり西行法師でゆこう！

芳如がどんな手を使ったのかはいまだに謎だが、昭和二四年貞明皇太后の行啓を仰ぐ。そして次の三つの碑を建立した。

二六年　西行歌碑（佐々木信綱書）
二七年　貞明皇太后行啓記念碑
三八年　佐々木信綱歌碑

鳴立庵は大淀三千風以後の記念物で、西行とは何の関係もないというのが当時の学会の通説であり、西行研究の権威佐々木信綱博士は鳴立庵と西行との伝説を否定していた。

芳如は佐々木信綱博士を説得しなければならないと考え、長い年月をかけて博士を味方にしてしまった。

博士の歌碑の建碑式は一一月三日に行なわれたが、佐々木門下の代表として出席された川田順氏は式後閑古庵主に、

「今回の芳如さんの御奔走は御手柄であった。私としては最早何も言わぬ積りだが、今後はこのような無理な企画はなさらぬ方がよい。西行は絶対にここには来ていないし、第一その頃ここは海中であった」

と言われたという。

しかし、どのような人が物言いをつけても佐々木博士の歌碑が建っているから、もはや問題はないかのようであった。

鈴木芳如本名よ志。実業家。明治一七年、東京市麹町に生まる。家計貧しく、神田小川町鈴木寫眞館に徒弟として入り、気に入られて長男安二と結婚。同四五年鈴木文具店創業、後印刷業も併営、昭和四年社名をオカモトヤと改め、今も盛業中。

編集部より

○　七月三日、富山県井波で連句大会。芭蕉に師事した浪化上人ゆかりの瑞泉寺に泊まった。雨降りしきる夜宿坊で付け合いしながら、時空を超えて人をつなぐ連句の不思議を思った。

○　出来事が、めまぐるしい。連句の夢見る力はどこまで太刀打ちできるのだろうか、と考える。

○　「季刊連句」に連載中の「芦丈翁俳諧聞書」が面白い。卒寿を越えた芦丈翁の博覧強記におどろく。

○　つゆの照り降り、皆様お大事に。

季刊「ねこみの」通信　第十二号
発行者　猫蓑連句会
印刷所　アトリエ・Ｎｅｋｏ